

宮下 遼

イフサン・オクタイ・アナル(Ihsan Oktay Anar)は一九六〇年生まれの男性作家である。生誕地はアナトリア中央部のヨズガトであるが、両親ともにイスタンブル出身であり、彼自身も中学卒業までイスタンブルで過ごし、いる。なお、父方はもともと一九世紀に中央アジアのカザンから移住した一族であり、アナルが作中の、のっぽのイフサン師や自身の風貌を「頬骨が高く、目のつり上がった」と形容しているのもこうした出自を踏まえてのことである。中学卒業後の一九七四年、アナルはイズミルへ移り高校を卒業、同地のエーゲ大学へ進学して博士号を取得後、二〇一一年に退官するまで同大学に勤務した。

処女作『霧の大陸の世界地図』に続く他の作品としては、一八世紀後半から一九世紀初頭のイスタンブルの三人の発明家を主人公としつつ、徒弟関係という閉鎖的な職人世界の実態や、当時のオスマン朝における科学技術に肉薄する『発明の書』(Kitab-ı Buluşlar, 一九九六年)、アナトリアの各地を舞台としたさまざまな奇譚を収めた短編作品——ただし、語り手は同じ一族に属する——『アフラー

スィヤープの物語』(Efsaneşahin Hikayeleri, 一九九七年)、一七世紀のイスタンブルを出立しフランスへ向かう帆船アマト号の道中記の体を為しつつ、悪魔の化身であるディヤヴォル(ディアボラ)船長の甘言を巡って巻き起こる同時代的な宗教・道徳観念の葛藤を描く『アマト号』(Anıt, 二〇〇五年)、一七世紀後半のイスタンブルを舞台に、音楽家や神秘主義者たちの思索を語った短編集『語らない者たち』(Sözkünü, 二〇〇七年)などがあり、いずれも綿密な調査や確かな洞察をもとに著される一方、アナルの作品には必ず登場する軽妙な狂言廻し——『霧の大陸の世界地図』では少年アリバズがこの役を担う——も登場して、読者の理解を手助けしてくれるなど上質な歴史小説となっている。このようにアナルは、最新作『第七の日』(Yedinci Gün, 二〇一二年)も含めた六作品のいずれもがオスマン朝を舞台にするという生粋の歴史小説家である。

今回訳出したのは彼の代表作『霧の大陸の世界地図』の第一章「コスタンティニーエの人々」である。本書の魅力は、海賊や道を踏み外した外科医、あるいは浮世離れした学究、少年奴隸といった社会のみ出し者たちが生き生きと活躍しながら、今日とはまったく異なる倫理観や科学知識に裏打ちされた

オスマン朝社会における哲学的、社会思想的な神秘を読者と比較的近い視点から解釈していくというスリリングな展開にあるだろう。物語はこのあとフランスの哲学者レンデキヤール(Randekyâr)——誰しも一度は耳にしたことがある著名なフランス人哲学者のオスマン語訛りであるが、本書の核心部分にも触れるのでその正体は敢えて伏せておきたい——と、不死の秘法を求めた大師エフライムなる人物の遺した「黒い金」をめぐる、イフサン師の息子ビュンヤミンの世界遍歴の様相を呈してゆくこととなる。

そもそも、オスマン朝を舞台とする歴史小説は、一九世紀末に上梓されたナムク・ケマルの『ジェズニ』(Cezni, 一八八八年)をおおよその嚆矢として、トルコでもかなり早い時期から書かれてきたジャンルである。二〇世紀にはヒサル(Yahya Kemal) Şinasi Tar. 一八八六—一九六三年)やオリク(Nedat Şirazi) Özk. 一八九五—一九六〇年)のような作家が知られる一方、他方では農村小説家としての認知が大勢を占めるケマル・ターヒル(Kemal Tahîr, 一九一〇—一九七三年)のような作家も当時、問題作とされた歴史小説を発表するなど、その書き手も舞台となる時代も多種多様であり、トルコにおける歴史小説はかなり裾野の広いジャ

ンルと言えらるだろう。ただし、多くの作品はオスマン朝の指導者たちの英雄性、あるいは後進性を事件史的な視座から描くか、ターヒルのように暗にトルコ革命とアタテュルク批判を展開するなど、いずれも現代的な視点から書かれた作品の域を出なかったという見方もある。

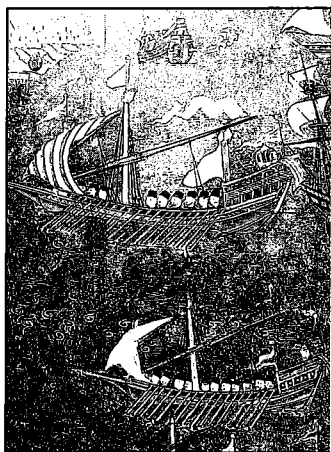
中・近世であれば勇壮な遊牧戦士やイエチエリ、近代であれば開明的で気風のいい海軍軍人、そして独立戦争期であればケマル・アタテュルクの幕下に集った憂国の帝国軍人や市民兵たち——こうしたステロ・タイプの英雄像を脱し、トルコ歴史小説の革新を促したのはオルハン・パムクである。今日、ノーベル文学賞作家としてモダニズム作家、あるいはポスト・モダニズム作家として評価されるパムクであるが、トルコ国内の文学に限って言えば、こうした歴史小説の方向転換を促した点も彼の功績に付け加えられてしかるべきである。なぜならパムクは、『白い城』(Beyaz Kule 一九八五年)や『わたしの名は赤』(Benim Adım Kırmızı 一九九五年)において、それまでの歴史小説の中では散発的にしか書き留められなかった要素、すなわちオスマン朝人士の日常生活の実際や社会思想、そして現代人とは異なるその心情の機微にまで明確に踏み込んだから

である。

この種の本格派と呼びうる歴史小説が、とくに『白い城』の発表後の九〇年代に入ると陸續と出版されるようになる。主なものとしては、イスタンブールの征服者であるメフメト二世を、英雄としてではなく、一人の人間として描いた点で革新的であったギュルセル(Gürsel 一九五一年)の『ボスフォラスの丘越え』(Boğaziçer 一九九五年)や一九世紀末のオスマン銀行に勤めたアルメニア人銀行家たちを描写したアトラン(Arman Altun 一九五〇年)の『刀傷のこころ』(Kılıç Yarasa Göz 一九九八年)——ただし後者の時代考証には数々の疑問が呈されている——などである。

そして、トルコ産本格派歴史小説の筆頭として必ず名前が挙げられるのが、本書『霧の大陸の世界地図』である。その理由は、作中においてオスマン語単語やオスマン語的な修辭法がふんだんに用いられ、また硬質かつ凝った文体が使用されるという擬古文的な文章表現の美しさとともに、研究者としての確かな見識に基づいた当時の宗教観、道徳観への造詣、あるいは細々とした事物や道具による舞台のリアリティが相俟って、上質な歴史感(Tone of Authenticity)を醸しだしているからである。

近年ではポスト・モダニズム文学の隆盛を受けて、このアナルをもその文脈で語ろうとする風潮が見られるが、彼の作品が広く受容される背景には、ウンベルト・エーコやアルトゥーロ・ペレス・レベルテなどによる外国産の良質な歴史小説に接してきたトルコの読者層が、ついに彼らを満足させるに足る自国産の歴史小説として本作を受け入れたからであろうと思われる。本書はパムクの『白い城』と並んで、トルコ歴史小説を語る上で無視できない作品と言えるのである。



オスマン帝国のガレー船